

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Inside and outside : Hisaye Yamamoto's "The streaming tears" as an epitome of the U.S.A.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1807

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



内と外 Hisaye Yamamoto, “The Streaming Tears” が描く アメリカ合衆国の縮図

篠田実紀

日系アメリカ人作家を代表する Hisaye Yamamoto は、太平洋戦争後、*Rafu Shimpō* や *Kashu Mainichi* などの日系新聞に、短編小説、エッセイ、詩など、バラエティに富んだ短い作品を精力的に寄稿した。その作品の多くは未出版であるが、日系人としての彼女の厳しい体験に裏打ちされた深い政治的メッセージを秘めた秀作が多く含まれている。Yamamoto 自身が認める通り、彼女の作品は、自らの体験や周囲の人から聞いた話を少し脚色して書いたものであり（Yamamoto, “A MELUS Interview,” 74 など）、フィクションの体裁を示す作品でも、多くの場合、ノンフィクション的要素を含んでいる。1951年、*Rafu Shimpō* に掲載された “The Streaming Tears” もそのような作品の一つである。

この作品は、アメリカの日系人の語り手の父（papa）が太平洋戦争後まもない時期に Los Angeles と Las Vegas で体験した出来事に関する話である。Yamamoto の多くの作品と同様、この話は作者の体験に基づくもので、語り手が Hisaye 自身、papa は彼女の父がモデルであると考えられる。Papa は、Los Angeles で 3 人、Las Vegas で 1 人の非日系人の男と出会う。タイトルの “streaming tears” とは、papa が Las Vegas で出会った男が流す涙を指し、語り手がこの涙の意味について思いを巡らせながら作品は終わる。Yamamoto はこの短編作品の中で、主観を交えることなく淡々とした調子で papa と 4 人の男たちの短い接触の事実を語りながら、1950年代のアメリカの人種構造を描くとともに、強い大国アメリカが慢性的に抱える外交ジレンマをも示唆する。

“The Streaming Tears” は、*Rafu Shimpō* の広告に埋もれるような形で 2 ページに分けて発表された目立たない作品であるが、この 1,000 語強の小さな物語の中には、第 2 次世界大戦後まもないアメリカが抱えていた内外の問題が凝縮されている。1945 年、原子爆弾投下により、日本に勝利したアメリカは、太平洋戦争を終結させると同時にソヴィエト連邦との冷戦に突入し、東西二大陣営は、共に核兵器をちらつかせながら、朝鮮半島やベトナムで代理戦争を行うことになる。国内に目を向けると、50年代は人種問題が表面化しつつあった時代で、Dr. Martin Luther King らを中心とする黒人たちが立ち上がって抵抗の声をあげ、60年代の公民権運動へと通じていく。

太平洋戦争中、アメリカの日系社会は、外交と内政の問題の影響を二重に受けた。1941年12月、日本軍の Pearl Harbor 攻撃により太平洋戦争が勃発、日本とアメリカは戦争状態に入る。アメリカ本土の日系人は、その人種ゆえに、アメリカ生まれでアメリカ国籍を持つ2世や3世も含めて、“Jap”という呼称で差別され、危険視されるようになる。翌年2月、Franklin Roosevelt 大統領は、大統領令 (Executive Order 9066) を発令、これに基づき、アメリカ本土の日系人は、居住地から収容キャンプへと転住させられる。キャンプに収容された日系人の3分の2は2世であった。彼らの多くは英語を主たる使用言語とし、自らをアメリカ人と認識しており、戦時中、アメリカに対する忠誠心を示すべく、アメリカ軍として戦った2世も少なくなかった。本論で取り扱う作家 Hisaye Yamamoto も、1942年から45年にかけて Arizona 州 Poston に収容された2世であり、44年に弟の Johnny をイタリア戦線で失っている。

この短編作品は、Las Vegas で仕事をしている papa がそこで出会った、涙を流す兵士の男の話に始まり、Los Angeles で出会った人種の異なる3人の男の話をはさんで、再び Las Vegas の男の話に戻るという構成になっている。Los Angeles での3つの出会いは、アメリカの内側の人種問題を、Las Vegas での出会いはアメリカの対外的な問題点を映し出すといえる。ここでは、Papa の4つの出会いを個々に分析し、そこに象徴的に現れるアメリカの内外の問題点を探る。更に、この作品の内容とよく似たエピソードを含む短編小説“Las Vegas Charley”の当該部分とこの作品を比較し、この作品が持つ意義と、将来に投げかける問題について考察する。

1. 内側：アメリカの人種分断

最初に papa が会えるのは、ポケットナイフを持った好戦的な赤毛の男 (“a belligerent, red-haired gentleman”) である。この男は、「お前はジャップか中国人か？中国人ならいいが、もしも…」 (“Are you Jap or Chinese? If you’re Chinese, that’s all right, but if you’re a Jap...”) と papa に迫り、ナイフを突きつける。男はここで言葉を切るが、戦後も日系人に対して危険な “Jap” への人種的敵対心がアメリカ社会に蔓延していたことを考えると、“if you’re a Jap...” だけで相手にはじゅうぶん意図が通じると考えたのであろう。もちろん、papa が中国系であるなら何もしないが、“Jap” ならこのナイフで刺してやるということであるが、男の挑戦に対して、papa は特別な反応を示さない。男は、相手が抵抗せず、かと言って脅しにのって「協力」することもないことにがっかりして (“neither resistance nor cooperation”) その場を立ち去る (Yamamoto, “The Streaming Tears,” 以下 ST, 26)。

次に papa は、路面電車を降りた時、酔っぱらいのメキシコ人 (“obviously inebriated Mexican gentleman”) に引き止められる。この男は、戦争で多くのメキシコの若者が死んだからという理由で、対戦国日本の人間である papa に向かって、こぶしを固めて一戦交えようとする。この男に対して papa は、自分も戦争で息子を失ったこと、メキシコと日本は昔から友好関係にあると告げる。男は、“Yeah?” といぶかしがりながら、去って行く (ST, 26-27)。

Papa はまた、Los Angeles の日系の雑貨屋で、黒人の大男 (“a huge Negro man”) と出会う。この男は、「お前は どうしてそんなにちびなんだ？」 (“How come you so short?”) と何度も大声で質問して papa にかからむ。この男に対して papa は反応を返さないが、男は、店の従業員の白人女性から「そんなふうには質問をして回るものじゃありません！」 (“You shouldn’t go around asking questions like that!”) とたしなめられて店の外に出される (ST, 27)。

以上、Los Angeles での papa と 3 人の男の出会いを比較対照すると、アメリカ社会の人種構図が見えてくる。最初に登場する赤毛の男が他の 2 人と異なるところは、ナイフを持っていることと、人種に言及されないことである。男が赤毛であるということから、白人であると推測されるが、人種への言及がないということは、マジョリティとして殊更に “white” と言及する必要がないということを示す。更に、ナイフという武器が象徴的に示すのは、白人がその人種のゆえに生まれながらにして持つ権力、優勢人種という既得権だといえよう。太平洋を渡って異国の地で努力を重ねて生活基盤を作った papa が、戦争と収容によってその基盤をすべて失い、逆風の中で何とかゼロから立ち直ろうとしていることなど、男は何ら考慮することはない。中身はどうあれ、忌まわしい人種は排除すべし、というゼノフォビアである。この男に対して何か言ったのかと子どもに聞かれた papa は、“Nothing” と答え、「怖かったから何も言えなかった。それに、そういう人には何も言わないのがいちばんいい」 (“I was so scared I couldn’t say anything. Besides, it’s best not to say much to people like that.”) と付け加える (ST, 26)。

赤毛の男と好対照をなすのが、黒人の大男である。この男が他の男と異なるのは、彼だけが体格への言及をされている (“huge”, “giant”) 点と、papa が日系であるという人種的事実を責めるのではなく、papa の身長が低いという体格をからかっている点である。当時、総じて黒人はじゅうぶんな教育も受けられず、収入も低く、マイノリティの中でも黒人の社会的地位は最低だった。そんな彼らにとって、頑丈な体格や卓越した身体能力が、他の人種に誇ることができる貴重な要素であった。おそらくは papa よりも生活水準の低いこの大男は、papa の低い身長をからかうことによってその場限りの優越感を得ようと

したのであろう。黒人と papa の出会いで興味深いのは、この黒人が、店の従業員の白人女性にたしなめられて出て行かされる場所である。ナイフを持った赤毛の男の時には人種に言及しなかった語り手が、この従業員に対しては、“white lady”と説明する。黒人の大男は、自分より明らかに身体的に弱いこの非武装の女性にたしなめられると、抵抗もせずに出て行くが、その無抵抗は取りも直さず、黒人にとっては、ナイフを持たない女性であっても、“white”であるという事実だけで絶対的優位を示すという当時のアメリカの人種構造を物語っている。赤毛の男の脅しからは恐怖を与えられた papa であったが、この場面では凶らずも同じ白人によって救われることになる。この話をしたときも、papa は子どもから、何か言ったのかと尋ねられ、“Nothing. It’s best not to say much to people like that.”と答える (ST, 27)。赤毛の男の時と同じ答であるが、黒人の男との出会いに関しては“scared”とは言っていない。

前述の白人と黒人、そして Las Vegas で出会う涙を流す男との出会いに関しては、どの男もしらふであり、papa はどの男に対しても言葉を返すことはない。しかし、papa が出会う男たちの中で唯一メキシコ人だけが酔っており、この男に喧嘩を売られた時に限って papa は言葉を返している。何故 papa は、酔っばらいのメキシコ人にだけ言葉を返したのであろうか。ひとつの理由として、言語の問題が考えられる。英語を母国語としない日系1世の papa にとって、自分と同じ移民であり、英語があまり堪能ではないと考えられるメキシコ人には、英語を母国語とする他の3人に対してよりも、臆することなく話すことができたのではないだろうか。しかし、papa が自分も息子を戦争でなくし、メキシコと日本は古くから友好関係にあると言ったところで、相手は酔っばらいであり、反論はなかったものの、これまで知らなかった情報に戸惑いながら立ち去っており、papa の真意が伝わったとは言いがたい。

以上、Los Angeles での papa の3つの出会いを見たが、人種の異なる3人の男は総じて、太平洋戦争中のアメリカ人の共通の敵日系人である papa に敵意を示した。しかし、もしこの3人の男たちが互いに顔を合わせる機会があったとしても、友好的なコミュニケーションが発生していたとは考えがたい。戦時中は Jap という共通の敵を憎むことによって回避されていた人種間対立が、戦争終結によって首をもたげたのが50年代であった。3つの出会いには、アメリカ国内の白人・黒人・ヒスパニック・日系の4つの人種集団の間に横たわった深い溝と、それぞれの集団を分断する敵対・嫌悪・無理解という否定的な感情が見えてくる。

2. 外側：アメリカの戦争

Las Vegas で papa が出会う第四の男は、ヒロシマに原爆投下をした B-29 のパイロットである。この男の人種は不明であるが、人種に言及されていないということは、おそらく白人であると考えられる。Papa の記憶によると、男は、「自分は原爆で多くの人々を殺してしまった」 (“I’ve killed a great many people”) が、「それは仕方がないことだった。僕が彼らを殺さなかったら、彼らが僕を殺していただろう」 (“But I couldn’t help it; if I hadn’t killed them, they would have killed me”), 「僕か彼らかだった」 (“It was either me or them”). と行って、涙を流したということである。この男の悲しみはここで終わらず、彼は、次は朝鮮戦争で戦うことになっていると言っていたという。前述の Los Angeles の 3 人の男とは異なり、Las Vegas のこの男は、日系である papa に敵意を示すどころか、涙を流して訴えかける。しかし、この男に対しても、papa は言葉を返さない (ST, 27-28)。

このエピソードは、アメリカと日本の戦いと核兵器使用が双方の人々に与えたインパクトを静かに語り、敵を倒すことによって味方を守るという単純なアメリカの外交政策への疑問を暗に投げかけている。2 世の語り手は、Las Vegas の男の涙の理由についていろいろ推察し、ヒロシマカナガサキに原爆を投下後、精神的に病んでカナダの僧院に入った男に関する新聞記事を思い出す。Las Vegas の男の涙は、原爆投下により多くの命を奪ったことに対する「ユダの涙」 (“tears of Judas”) なのか、あるいは賭けに負けたとか、家族の問題とか、単にさびしかったとか、全く別の理由で泣いていたのかもしれないし、酔っていなかったと papa は言っていたがほんとは酔っていたのかもしれない、と、語り手は思いを巡らす (ST, 29)。

Las Vegas の男の涙の意味を、語り手と共に考えてみよう。戦争には、味方 (“me”) と敵 (“them”) しか存在せず、敵への攻撃を選ばなければ敵からの攻撃を受け、味方の命を奪うことになる。21 世紀の現在に至るまで、アメリカでは、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下は、戦争の早期終結を成し遂げ、多くのアメリカ人の命を救ったという解釈は支持されており、原爆を投下して多くの日本人の命を奪った兵士の非を唱える声は少ない。1950 年代のアメリカでは、原爆を投下した兵士は英雄視されていた。しかし、実際に発射ボタンを押したこの男は、自分の行為によって大量の命を奪うという結果が出たという事実を知って、罪の意識を感じたのであろう。彼は、自らの「英雄的」行為が別の見方をすれば大量殺人であったという後ろめたさと、自分が英雄視されるアメリカ社会の中でその弱さを表明できない苦しみに苛まれていたにちがいない。そんな彼が日系人に会った時、ようやく自分の感情を解放できたのだろ

う。1950年代にはまだ PTSD という病名は一般的ではなかったものの、戦後に PTSD の症状を示す復員兵は存在しており、この男の涙も、原爆投下という行為とその結果にまつわる心の傷であるということは考えられる。

しかし、ここで注意したいのは、男の涙に対して、語り手が、「ユダの涙」以外に、賭けに負けたことや家族の問題や孤独感といった、謝罪や反省とは無関係の可能性を呈示し、極めて冷静なスタンスで男の涙を解釈している点である。たしかに、男の涙だけを見たら、彼が原爆投下を悔い、papa に謝罪をしているように見えるが、実はこの男は、papa に対して謝罪や後悔や反省の気持ちを言語化しているわけではないということである。男はただ、自分が多くの命を奪ったという事実と、それがやむを得なかったという自己弁護的な言葉を発しているにすぎない。男の涙は、ただ単に自らの心に抱え込んだ苦しみを papa にぶつけるだけの自己憐憫に過ぎず、そんな利己的な涙を見せられても日系人が戦中戦後に受けた心の傷が癒えるわけではないのである。

次に、この兵士に対する papa の沈黙について考えてみよう。もちろん、自分と同じ移民で英語のレベルに大差ないメキシコ人とは異なり、兵士はアメリカ人であり、papa は自分の思いを伝えるだけの英語の言語能力がなかったことが papa の沈黙の大きな一因であろうが、たとえ papa に十分な言語能力があったとしても、彼の気持ちを言い尽くすことはできないほど、複雑な心情が入り乱れていたと考えられる。いまだ敵国民 Jap というレッテルを貼られたアメリカの日系1世にとって、ヒロシマ・ナガサキと日本の敗戦は、Pearl Harbor とは異なる種類の苦しみの種であった。原爆が投下された国に生まれ育ち、そこに血縁者を持ちながら、アメリカで生活し、おそらく日本に帰ることなくアメリカに骨を埋めるであろう papa は、原爆投下の結果の残虐性を追及しようにもできないもどかしさを持っていたことだろう。そんな彼にとって、アメリカ人から原爆投下について涙ながらに語りかけられることには戸惑いの気持ちがあったに違いない。アメリカと日本が敵味方に分かれた戦争において、アメリカの日系人は、アメリカ人 (American) か日本人 (Japanese) かの二者択一に迫られた。一方を選ぶということは他方を捨てるということを意味し、双方を持つという選択肢は、事実上なかった。この兵士が papa に声をかけたのは、papa を日本人と認識したからである。Papa を自らの同胞のアメリカ人として認めず、あくまでも異国人 (alien) としてしか意識していないという点では、兵士もまた赤毛の男やメキシコ人の男と大差はない。しかも、上で指摘したとおり、男は謝罪や反省の気持ちを表明しているわけでもなく、その涙は自分の感情を解放するだけの利己的なものであるということは、papa も察していたであろう。

しかし、だからといって、papa がこの男に対して反感を抱いたとも考えがたい。少なくとも、papa にとっては、ナイフや握りこぶしよりは涙の方が受け入れやすいものであっただろう。兵士もまた、敵を殺すか自分がやられるか (“It was either me or them.”) という二者択一を迫られて苦渋の選択をしたわけであり、決して原爆投下によって勝利の歓喜に浸っていたわけではない、という気持ちは、papa に伝わったはずである。

語り手は Las Vegas の男の涙についてコメントした後、原爆を投下する無人飛行機が発明されたという記事に言及し、そういうものができたら、涙を流すこともカナダの僧院に入ることもなくなるから、「すばらしいと思う」 (“I think this is just wonderful”) と言う。しかしすぐに、「こんな飛行機を送り出すことを任じられた人々が嘆き始めることがないなら」 (“Unless, that is, the people assigned to sending these planes on their missions start moping.”) と続け、最後に、きっと papa はそれを嘆く人に出会うだろう (“Well, papa, no doubt, will meet up with one of those.”) と付け加える (ST, 30)。たとえ無人機から爆弾を落としても、人命を奪ったことに罪の意識を覚えて涙を流す人は出てくるだろう、というのである。

上の記述はきわめて預言的である。9.11 以降、アメリカでは、軍事目的での無人飛行機 (UAV=unmanned aerial vehicles または drone) の使用がふえている。当初はテロリストの所在探索などの偵察目的の限定的使用が多かった UAV であるが、アフガン戦争やイラク戦争では実戦に投入され、パキスタンやイエメンでもテロリストへの攻撃に用いられている。兵士は直接戦場に赴く必要も、上空で敵機や地上からの攻撃を受ける心配もなく、飛行機に取り付けられたカメラが映す映像を基地のモニター画面で見ながら、遠隔操作で攻撃を行うことができる。しかし、このような無人機攻撃 (drone attack) においても、遠隔操作を行うのは、「無人機パイロット」 (“drone pilot”) と呼ばれる生身の人間であり、これらの兵士たちの中にも PTSD を発症する例は確認されている。

無人機パイロットは、チームを組み、長時間をかけて無人機に搭載された高性能のカメラがとらえる画像や映像を分析しながら、標的となる人物や組織を追い、確信が持てたところで攻撃をする。しかし、実際に攻撃をする時間に比べると、標的を追う時間の方がはるかに長時間であり、連日に及ぶこともある。しかもその間、シフトにより非番の時は帰宅するため、バーチャルな戦場と日常生活を行き来することになる。アメリカ軍の准機関紙 *Stars and Stripes* はこの状態を「心理的には戦場のまっただ中にあり、肉体は別の大陸にある」 (“Psychologically, they’re in the middle of combat. But physically most of them are on another continent”) と述べ、そのことが「無力感」 (“sense of helplessness”) と述べている。

につながると言っている (Zucchini)。

また、有人飛行機を操縦する兵士であれば、自分が攻撃する相手の姿を見ることはないが、無人機パイロットの場合は、長時間をかけてズームインしながら敵の姿を追い、自分にとってはモニターを通して外観を熟知した相手を攻撃することになる。それだけではなく、無人機パイロットには、攻撃の成果を確認するためにその一部始終を見届ける必要があり、敵の死体の状態確認なども行わなければならない。人命を奪ったという事実以上に、命を奪われる現実を目の当たりにした無人機パイロットが、原爆投下ボタンを押した有人機パイロットの想像力が形成した後悔の念より重篤な苦悩に苛まれることは十分考えられる。その意味では、UAV は決して「無人」ではない。空軍も、UAV という名称ではなく、RPA (remotely piloted aircraft) という名称を採用するようになっていくという。空軍の精神科医 Kent McDonald 大佐は、「たとえ自分の手で直接発砲しなくても、救うことができないと感じるだけで、罪の意識は生じ得る」 (“There can be guilt even if no shot is fired, just from the fact that you don't feel you can help”) とコメントしている (Zucchini)。

ファシズム、共産主義、テロリストなど、相手は変われども、そして、太平洋、ベトナム、イラクなど、舞台は変われども、アメリカはこれまでずっと、遠く離れた土地でその時々の「敵」と戦って来た。しかし、いかなる方法をとろうとも、軍事攻撃がある限り、犠牲者が出ることは避けがたく、“The Streaming Tears” の語り手が最後に述べているとおり、被害者のみならず、加害者もまた、やり場のない罪の意識に苦しむことになるのである。兵士は涙という形で、papa は沈黙という形で、共に、不可能な選択を迫る戦争に人生を振り回された者たちのやり場のない空しさを物語る。

3. “Las Vegas Charley” との比較

寡黙な日系人を中心に据えて、アメリカが抱える内外の問題をきわめてコンパクトな形で描いた “The Streaming Tears” は、1991 年に、*Six Short Stories by Japanese American Writers* と題された大学の教科書版として日本の鶴見書店から出版されてはいるが、アメリカでは出版に至らなかった。Yamamoto の 15 編の短編小説は、1988 年に *Seventeen Syllables and Other Stories* という本になって出版され、その後 2001 年に更に 4 編が追加されて改訂・増補版が出たが、この短編はそのいずれにも収録されていない。しかし、*Seventeen Syllables and Other Stories* に収録された 1961 年作の “Las Vegas Charley” には、“The Streaming Tears” に似たエピソードが、主人公 Charley の生き様を追うメインストーリーからは逸脱した文脈で、ごく短い形で出てくる。この二つの作品を比較す

ることにより、“The Streaming Tears” が投げかける問題点について考察してみたい。

Charley（本名 Kazuyuki Matsumoto）も、“The Streaming Tears” の papa と同じく、Hisaye Yamamoto の父 Kanzo Yamamoto をモデルにした熊本県出身の日系 1 世である。熊本県からカリフォルニアに渡った Charley は、太平洋戦争後、ギャンブルにとりつかれ、単身 Las Vegas へ移って中華料理店で皿洗いとして働くが、実質はギャンブルで生計を立てている。ある時、原爆実験をするために軍がしばらくその地に滞在していたが、客として店を訪れた兵士の一人が、自分がヒロシマ原爆投下のボタンを押したことを涙ながらに語った。彼は Charley に謝罪し、カウンターを叩いて、“But it was them or us, you understand, it was them or us!” とつぶやく（Yamamoto, *Seventeen Syllables and Other Stories*, 以下 SS, 72）。軍はまもなくその地から出て行き、Charley はほっとするが、この出来事は彼に、Los Angeles での 2 つの出会いを思い出させる。それは、ナイフを持った白人と酔っぱらいのメキシコ人との “The Streaming Tears” と同様の出会いである。

このように、“Las Vegas Charley” には “The Streaming Tears” と同様のエピソードが登場する。二つの話の内容そのものは同じであるが、全体的に “Las Vegas Charley” の人物描写の方がより具体的で、細かく見ていくと更に相違点があることに気づく。そして、“The Streaming Tears” では、男たちに対する papa の反応——メキシコ人に対しては言葉を返したが、それ以外の男たちに対しては沈黙——の理由や Las Vegas の男の涙の理由が曖昧にされていたが、“Las Vegas Charley” ではそれらの理由が、はっきりと限定的に述べられている。

まず、Las Vegas の男に注目してみよう。“The Streaming Tears” ではこの男は平服であり、彼が本当に兵士かどうかは明らかではなかったが、“Las Vegas Charley” では男は軍服を着ており、現役の兵士であることが歴然としている。更に、“The Streaming Tears” では男の涙の理由が明示されず、語り手が幾通りかの可能性を挙げているが、“Las Vegas Charley” では、この兵士ははっきりと Charley の同国人に対して自分がしたことを謝罪しており（“apologized for the heinous thing he had done to Charley’s people”）、兵士が後悔と謝罪の気持ちから涙を流していることがわかる。また、Charley は、papa と同様、この兵士に対して何も言葉を返さないが、ここではその理由が言語能力の不足であると明示されている（LC, 72）。次に、ナイフを持った男であるが、“The Streaming Tears” では彼の人種に言及されなかったのに対して、“Las Vegas Charley” では、“white man” と明示される（SS, 72）。メキシコ人の男については、“The Streaming Tears” では、papa への敵意の理由を “so many Mexican boys had died in the war.” としか

言っていないが、“Las Vegas Charley”では、自分自身の息子が戦争で日本人に殺されたから自分は日本人であるお前を殺してやる (“My boy, my Angel, he die in the war! You Japs keel [kill] him! Only nineteen years old and you Japs keel him! I’m going to keel you!”) とはっきり言っている (SS, 72)。“Las Vegas Charley”では、更に、ナイフを持った白人に対しては沈黙していた Charley が、メキシコ人には言葉を返す理由が、Charley は畑仕事の収穫の時にメキシコ人を雇ったことがあり、「メキシコ人は白人ほど怖くない」 (“somehow a Mexican had not been as intimidating as a white man”) と述べられている (SS, 72)。

“Las Vegas Charley”の Charley と異人種の男たちとの出会いのエピソードが “The Streaming Tears” と異なる点を別の角度からみると、Charley が出会う 3 人の男たちはすべて酔っばらっているのに対して、papa が出会う 4 人の男はメキシコ人以外すべてしらふであるという点に気づく。酒に酔った時に、しらふの時にはしないような言動をする人はよくいるが、通常、酔った時の言動は、一時の感情を抑えられない衝動的なものとして、真剣に受け入れられることはない。従って、同じナイフを持った白人の男のエピソードでも、“Las Vegas Charley”では、酔った勢いで日頃の日本人への敵対心が一時的にむき出しになったのであり、この男はしらふの時にはこんな乱暴な態度はとらないだろう、という推定が可能であるのに対し、“The Streaming Tears”では、男は自分の行為を十分認識しており、恒常的に日系人を憎み、意図的に敵意を papa にぶつけているという、強い意志を感じさせる。Las Vegas の男については、papa/Charley に抱いている気持ちが敵意ではなく好意的なものであるが、こちらも同様に、“Las Vegas Charley”ではその感情が一時的に出たもので、“The Streaming Tears”では恒常的なものである可能性が高いと考えられる。“Las Vegas Charley”のエピソードが、基本のストーリーからは逸脱した形で短く出てくることを考え合わせても、Charley が出会う男たちがすべて酔っているこのエピソードそのものの真剣味が薄れ、大した重要性がないかのような印象を読者に与えるといえよう。それに対して、“The Streaming Tears”では、異人種の男たちをしらふとして描くことで、彼らが papa に抱いていた感情の強さがクローズアップされることになる。

“The Streaming Tears”と “Las Vegas Charley”のエピソードが大きく異なるもうひとつの点は、前者に登場する黒人が後者には登場しないということだ。“The Streaming Tears”が発表された 1951 年と “Las Vegas Charley”が世に出た 1961 年の間には 10 年の開きがあるが、この 10 年の間に、アメリカ社会は大きく動いた。54 年のいわゆるブラウン裁判 (Brown vs. Board of Education) や翌年のローザ・パークス事件に端を発したモンゴメリー・バス・ボイコット

(Montgomery bus boycott) は、60年代の公民権運動へと通じていく。太平洋戦争中の Los Angeles では、収容所に入れられていた日系人がかつて住んでいた場所に黒人が住むようになるが、日系人と黒人は比較的友好的な関係を築き、戦時中の収容の不当性に対して沈黙していた日系人は、やがて黒人の公民権運動に触発されることになる。

Hisaye Yamamoto は、戦後しばらく黒人紙 *Los Angeles Tribune* のスタッフを務めたという事実が示すように、黒人に対して共感を抱いていた。2001年の改訂・増補版 *Seventeen Syllables and Other Stories* には、この頃の体験に基づいて書かれた “Fire in Fontana” (1985) が追加されている。白人地区に住居を持った黒人家族が白人に家を焼かれ、家族全員が亡くなる事件を取り扱ったこの短編について、Yamamoto は、改訂・増補版の序文の中で、黒人の奴隷としての200年に比べたら自分たちの収容など取るに足りないことだと気づいた (“Painfully, in the two to three years of my employment, I came to realize that our internment was a trifle compared to the two hundred years or so of enslavement and prejudice that others in this country were heir to.”) とコメントしている (Yamamoto, SS, 129)。

“Las Vegas Charley” で黒人を登場させず、Charley が白人に対しては沈黙しているもののメキシコ人とは話をするというエピソードにとどめ、しかも Charley が会える異人種の男たちは皆酔っばらっているということにより、“The Streaming Tears” が描く異人種間分断による緊張感や原爆投下にまつわる問題意識の深刻度は大きく緩和される。“Las Vegas Charley” は、あくまでも日系1世の男とその家族の生き様がクローズアップして描かれ、それを取り巻くアメリカ社会は遠い背景としてのみ存在する。また、読者に多くの問いを出し、共に考えようとする “The Streaming Tears” の語り手とは異なり、“Las Vegas Charley” の語り手は、読者の問いへの答と情報提供に主眼を置くため、明解である。Charley や他の登場人物の心情が限定的に語られ、彼らの言動の理由を断定するため、読者の想像力を言外の可能性へと導くことはない。従って、“Las Vegas Charley” の読者は受動的に語りを聞くことになるが、“The Streaming Tears” の読者は、疑問を抱いた結果、能動的に考えることを余儀なくされる。人種分断の状況を浮き彫りにし、核兵器使用を疑問視する “The Streaming Tears” がアメリカでは出版されず、これらの問題を遠景に追いやった “Las Vegas Charley” は出版されたという事実は、アメリカが唱える自由と民主主義そのものに挑戦する環境が、いまだに整ってはいないということを示しているであろう。

4. 21世紀へのメッセージ

ヒロシマに原爆を投下した男が涙を流してから70年近くの年月が経過し、アメリカは、そして世界は、変わったのだろうか。確かに、21世紀のアメリカでは、日系だという理由だけで白人からナイフを突きつけられたり、肌の色によって学校やバスの席が決まったりというあからさまな人種差別はなくなった。2008年には、“Change!” “Yes, we can!”と訴えたアフリカ系の血を引くBarack Obamaが大統領に選出され、現在2期目を務めている。彼は、中産階級を中心とするすべての国民の機会均等を目指し、国内の医療や教育の改革に取りかかった。

アメリカ国外を見ても、ヒロシマ・ナガサキ以降、核兵器やそれを上回る破壊力を持つ大量破壊兵器が使用されたことはない。2009年4月、就任から間もないObama大統領は、ヨーロッパの中心に位置するチェコのプラハで、アメリカの大統領としては初めて核廃絶を訴えた。大統領は、また、イラクとアフガニスタンから兵力を撤退し、同年のノーベル平和賞を受賞した。アメリカは軍縮と平和に向けて動き出したかに見えた。

2013年8月、Martin Luther Kingらが率いたThe March on Washingtonの50周年記念式典が開催された。8月28日、かつてKing牧師が歴史的な“I Have a Dream”の演説をしたLincoln Memorialで、黒人初の大統領が記念の演説をしたことは、意義深く、象徴的な出来事であった。Obama大統領は、King牧師たちの努力により、アメリカの歴史は動き、少しずつながら変化がもたらされたと述べ、今後も「共感と連帯感、50年前にここで表現された良心の一体化の残り火に再点火をしなければならない」(“We’ll have to reignite the embers of empathy and fellow feeling, the coalition of conscience that found expression in this place 50 years ago.”)と、人々が結束して歩みを共にすることの重要性を訴えた(Obama, “Remarks by the President at the ‘Let Freedom Ring’ Ceremony Commemorating the 50th Anniversary of the March on Washington”)。しかし、大統領の演説は、どこか歯切れが悪く、精彩を欠いていた。

アメリカ国内の人種差別問題は解決していない。2012年2月26日、フロリダ州Sanfordで、17歳の黒人少年Trayvon Martinが、自警団の28歳の白人青年George Zimmermanに銃で殺害された。Zimmermanは、Martinが襲いかかって来て危険を感じた故の正当防衛であると主張したが、Martin側は、この件は黒人に対するヘイトクライムではないかと反論した。2013年7月13日、フロリダ州裁判所は、Zimmermanの主張を認め、無罪判決を出した。この事件および判決は、全米を揺るがし、アメリカでの人種差別と人種分断の根強さを浮き彫りにすることになった。アフリカ系の血を引くObama大統領自身も、こ

の事件に対して異例のコメントを発表し、その中で、自らの体験も交えながら、射殺された少年が35年前の自分であったとしてもおかしくはない (“Trayvon Martin could have been me 35 years ago.”) と語った (Obama, “Remarks by the President on Trayvon Martin”). この事件の真相にどの程度まで人種差別が影響したか未だ解明されてはいないが、銃所持の「自由」が認められた現在のアメリカで、人種差別は、ポケットナイフによる威嚇程度では済まない深刻な結果を産み、それが更に人種分断を進める悪循環となっている。

Obama 大統領は The March on Washington ワシントン大行進 50 周年の記念式典の日、外交面でも、就任以来最大の危機に直面していた。8月21日、シリアで化学兵器が使用され、多数の子どもを含む犠牲者が出た。国連は調査団を派遣したが、その報告が出る前に、Obama 政権は、兵器使用はシリアの Bashar al-Assad 政権側であると断定し、国連決議を経ない単独の部分的軍事介入を提案した。しかし、ロシアは、政権側が使用したという証拠はないという理由でアメリカを牽制、アメリカの最大の同盟国イギリスの議会も8月29日、軍事介入に対して反対の議決をした。シリア攻撃はアメリカ国民の支持も得られなかった。前任者 George W. Bush 大統領の時代、大量破壊兵器がある理由で攻撃したイラクでは遂に兵器が発見されなかったという事実が、国民の記憶に新しかったのである。

苦渋の決断に迫られた Obama 大統領は、8月31日、シリア攻撃については議会に結論を委ねるという選択肢をとった。大統領は、懸案を抱えたまま G20 のサミットに出席するため、ロシアのサンクトペテルブルクに飛ぶ。それに先立ち訪問したスウェーデンのストックホルムで9月4日に行われた記者会見の席で、大統領は、スウェーデンの女性ジャーナリストから、「ノーベル平和賞受賞者であることとシリア攻撃をしようとしていることにおけるジレンマについて語ってもらえますか」 (“Could you describe the dilemma to being a Nobel Peace Prize winner and getting ready to attack Syria?”) という厳しい質問を受けた。大統領は、自分はその賞には値しない (“certainly unworthy”) と平和賞の授賞式で言ったはずだと前置きし、自分はアフガニスタンとイラクから軍事撤退したという事実を再確認した上で、平和の大切さは認めるが、世界は暴力に満ちており、我々に共通の人間性を侵害するような行為に対してどの時点で立ち向かうべきか (“at what point do we need to confront actions that are violating our common humanity”) という問題に我々は直面している、と答えた。そして最後に、「何もしないということがないようにすることが道德的だ」 (“the moral thing to do is not to do nothing.”) と締めくくった (Lucas)。あえて “attack” という言葉を使わず、“not to do nothing” という回りくどい表現を選んだことが、

内外で共存と協調を呼びかけてきた平和主義的な Obama 大統領らしいが、苦し紛れの発言であったことは否めない。結局この問題は、シリアが保有している化学兵器を廃棄させるというロシアの提案をアメリカが受け入れる形になっているが、Assad 大統領は、化学兵器は政権側ではなく反対勢力側が使用したと主張し、解決の道筋は立っていない。少なくとも当面の軍事行為は回避されたものの、Obama 大統領が内外で大きく求心力を失ったことは確かである。

アメリカが軍事介入すれば、化学兵器による攻撃よりも遥かに多くの人命が失われる可能性は高い。軍事攻撃を受ける側にとって、それが国内の敵によるものであっても、国外の援助者によるものであっても、結果は同じである。たとえ化学兵器工場が破壊されても、たとえ現政権が打倒されても、一度奪われた命は戻ってはこない。そして、前述のような無人機による攻撃が実施されるようなことがあれば、心を病んだ軍人がさらに増産されることになる。しかし、だからといって、Obama 大統領の言うとおり、明らかに非人道的な行為に対して何もしなくてもいい、ということはあるとはいけない。核廃絶を訴えた大統領であるが、現実の国際社会では、武器を捨てることは、武器を使用することよりもはるかに困難であるということを実感していることであろう。人と人とがいがみ合い、傷つけ合うという歴史はいつまでも繰り返すのかもしれない。それでも、対立する立場にあった人間と出会うとき、涙を流すことのできる人が一人でもいるということは、新たな可能性へのかすかな希望の光を感じさせるものである。そして、その涙の意義について、立場や背景の異なる人々が終わりのない議論をする必要があるのだろう。いつか近い将来、“The Streaming Tears” がアメリカのみならず全世界で出版され、papa の沈黙と Las Vegas の男の涙をめぐる、一般読者が国際的レベルで語り合うことができる日が来ることを願ってやまない。

参考文献

Lucas, Fred. “Swedish reporter actually confronts Obama on his Nobel Peace Prize.” *The Blaze*. 4 September 2013.

<<http://www.theblaze.com/stories/2013/09/04/swedish-journalist-confronts-obama-on-being-a-nobel-peace-prize-winner-and-getting-ready-to-attack-syria/>>. Accessed on 20 September 2013.

Obama, Barack. “Remarks by the President at the ‘Let Freedom Ring’ Ceremony Commemorating the 50th Anniversary of the March on Washington.” *The White House*, 28 August 2013.

<<http://www.whitehouse.gov/photos-and-video/video/2013/08/28/president-obama-marks-50th-anniversary-march-washington#transcript>> Accessed on 20 September 2013.

Obama, Barack. “Remarks by the President on Trayvon Martin.” *The White House*. 19 July 2013.

<<http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2013/07/19/remarks-president-trayvon-martin>> Accessed on 20 September 2013.

Yamamoto, Hisaye. “A MELUS Interview: Hisaye Yamamoto.” Crow, Charles, L. *MELUS*, 14 (1), 1987. 73-84.

Yamamoto, Hisaye. “The Streaming Tears.” *Rafu Shimpo* 20 December 1951: 22, 24. Rpt. *Six Short Stories by Japanese American Writers*. Eds. Iwao Yamamoto, Mie Hihara, and Shigeru Kobayashi. Tokyo: Tsurumi Shoten, 1991. 25-30.

Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories*. 1988. New Brunswick: Rutgers University Press, 2001.

Zucchini, David. “Stress of combat reaches drone crews.” 18 March 2012. *Stars and Stripes*. <<http://www.stripes.com/news/>> Accessed on 20 September 2013.

